

名古屋工業会の事業に携わって

(一社)名古屋工業会 副理事長・名古屋支部長 仁科 健 (B50)

ごきそ発行500号おめでとうございます。52年間にわたる編集関係者各位のご尽力に感謝いたします。今回、名古屋支部長を仰せつかっている関係から、記念号への執筆の機会を頂戴しました。

1971年(昭和50年)に経営工学科を卒業(B50)し、教員として41年間名工大にお世話になりましたので、この間、同窓会活動にコミットさせていただく機会がありました。本稿で名古屋工業会、経友会に係わった事業を振り返り、500号記念号発行へのお祝いに代えたいと思います。

同窓会活動としての大きなイベントは、1981年(昭和56年)に名古屋工業会と経友会との共催で行われた「経営工学科創立20周年の記念事業(特別講演会)」でした。このとき、名古屋工業会理事長であった佐藤知雄先生に祝辞をお願いしました。当時、名古屋市科学館の館長であった佐藤先生に祝辞のお願いに伺ったことを思い出します。経友会の事務局としてですが、名古屋工業会にコミットしたのは、これが最初ではなかったでしょうか。

本記念事業では、大野耐一氏から「日本的経営の現状と将来」を演題とした講演を頂戴しました。当時(1980年代)は日本のものづくりが「いけいけどんどん」の時代であり、乗用車や家電の日本製品が北米市場を席巻した時代です。エズラ・ヴォーゲルによる「ジャパン・アズ・ナンバーワン」が発行されたのが1979年であり、日本的経営が世界に注目されました。その意味では、この時期に大野氏による上記の講演は、まさにタイムリーな企画であったと思っています。ただし、このときにはまだトヨタ生産方式が世界に注目されていたわけではありません。

1998年度と1999年度には、経友会が名古屋支部の事務局担当となり、幹事長として支部運営に携わりました。支部長は経営工学科1期生の内山康夫氏、当時の工業会理事長は藤原俊朗氏(当時、新日本製鐵(株)顧問)でした。このときが、名古屋工業会の運営に携わった最初ではなかったかと思っています。

また、名古屋工業会による学生支援の事業であるOBトップセミナーに係わることができました。2012年には、川田武司氏(当時、(株)アドヴィックス取締役社長B46)と田中浩一氏(当時、三井物産(株)代表取締役常務執行役員B53)を、2014年には奥田隆司氏(当時、シャープ(株)会長B51)を講師として招聘することができました。

2019年度と2020年度に再度、経友会に名古屋支部の事務局担当が回ってきました。20年前は幹事長を務めましたが、今回は支部長です。しかし、担当1年目の最後の行事であったはずの春の懇親会以降、2年目もコロナ禍により、支部総会／講演会、見学研修会、新年互礼会、いずれも開催できませんでした。

そこで、支部総会／講演会、見学研修会に充てる予定の費用を「名古屋工業大学教育研究緊急支援金」として、コロナ禍での学生生活を支援するために寄付をしました。また、情報発信も必要ですので、新年互礼会に代えて「木下学長と加川理事長による新春対談」の録画配信を行いました。

以上の行事内容は、それぞれ当時のごきそに掲載されています(新春対談は本誌に掲載されています)。卒業生のひとりとして、微力ではありますが、同窓会活動に携わることができ、その内容がごきそに記載されていることをうれしく思います。

最後に、名古屋支部の活動について述べさせていただきます。名古屋支部の特徴は、大学をドメインに含むことと。また、単科会ごとに事業が実施されていることです。この状況下で名古屋支部のあるべき姿は如何に?この課題に対して、大鹿前名古屋支部長(計測会)のリーダーシップのもとにワーキング

グループで議論がなされました。その答申をもとに、2019年度の活動方針を、「大学、および工業会本部との連携」「単科会の相互連携」としました。2019年度は講演会を大学の公開講座と共催して行いました。ホームカミングデー開催時に行った経友会の講演会を一般にオープンしました。新企画の春の懇親会は、大学主催の音楽プロジェクト後に企画しました（残念ながらコロナ禍によって未開催となりましたが）。2021年度はCE会が名古屋支部の事務局担当となります。少なくとも初年度はWithコロナの状況下での活動を余儀なくされます。次期事務局を中心に名古屋支部幹事会で知恵を出しながら、上記の名古屋支部の特徴を活かした活動を展開できたらと思っています。



佐藤知雄先生（1981年：経営工学科創立20周年特別講演会にて）



大野耐一氏（1981年：経営工学科創立20周年特別講演会にて）

昭和41年前期の空手道部

(一社)名古屋工業会 理事 森川 民雄 (W45)

1年間の予備校通いを終えて、僕はこの大学に入った。1年生の授業は教養が主で、それは萱場の分校で行われた…御器所の本校では専門授業。分校は正門を入ると左右に2階建ての教室がある、これは昔の第三師団第6連隊の兵舎と聞かされた。そこを通り過ぎ南に行くと突き当りが裏門で、その手前の西側に体育館がある。その西側には馬術部の厩舎が有り、当時は確か馬が2頭いた。

4月の中旬だと覚えているが、空手道部の練習日に様子を見に行き、入部の意思を伝えた。既に、1年生^{*1}が数人入って、先輩に並んで稽古をしていたので、焦りを感じる。次の練習日には体育の服装で参加する。空手着を使う為には、同年の友達と今池の専門店まで行き、白帯と共に注文する。

1年の稽古は、それまでの運動不足を改めて、今まで聞いたことも見たことも無い動作を真似ることから始まる。特にきつかったのは、『腕立て伏せ』と『腹筋』で、最後までできた事は無かった。その頃の練習は、3年生が幹部で、本校から週に3回来て練習を指導していた。3年生は7人、2年生は4～5人で、日によって変わった。

また辛かったのは『巻き藁』で、練習の初めてと最後に『巻き藁棒』に脱穀した後の藁で編んだものを巻付けて拳（こぶし）で左右100回づつ突く練習。慣れていないので、突いた先が滑って皮膚を擦りむいたり、まともに当たれば、それはそれで皮膚がつぶれて血が滲む、兎に角、血まみれになる。

そんな或る日、トヨタスポーツ800が体育館の横に停まり、われらの土生良樹師範の登場である。さすが師範、目付きが鋭い、また言葉もきつい。その師範に、練習後血まみれの拳を水洗い場で洗っている折に、『男は一度始めた事はやり通せ』とお声をかけて頂いた。

5月の連休中に予定されている『第3回東日本大学空手道選手権』で拓殖大学が決勝で慶応義塾大学に負けてしまい、暫くご機嫌が悪かった。

それからすぐに、『東海地区春季大学空手道選手権』が開催される計画が有って、師範は『3位以上に入れなければ、部員全員丸刈り』と言う事になり1年生は皆困った事になったと思った。

しかし、我が先輩方は強かった。3位になり、皆助かったと胸をなでおろした。

週3回の練習はいつも同じで、2時間のうち、1時間が基本で『突き』と『蹴り』と『受けと払い』の繰り返し、残りの1時間が『型』と『組手』で『型』は盆踊りみたいに動きは決められており、それを間違えぬ様に力とスピードを入れねばならない。慌てるとよく間違える。

『組手』は格闘技で、二人で会い向かいに立ち会い、技を掛け合うがこれも約束事が有り、1年生は『五本組手』が殆どで、それでも体中あざや赤くはれる。1年生は自由に相手と攻撃と防御ができる『自由組手』はやらせてもらえない。

5月の中頃に、『新入生歓迎コンパ』があり、飲む事が始まると直ぐに上級生が今日は1対5と言う事で、全員が幹部（3年生の事、4年生は神様、2年生は中古、1年生はゴミ）の前に進み、幹部の飲まれるもの（ビールか日本酒）を5倍飲むと言う事で、幹部全員6人を回らなければならない。今ではとてもできない事…1年生は18歳か19歳で、今では飲ませるはいけない対象。

また、この頃よくあった話で、『新歓コンパ荒らし』がいて、入部したばかりと言って、たらふく飲んで帰り、他の部でも同様の事をしてタダ飲みするやからが出没した。

6月には昇級昇段審査があり、土生師範・越智会長（OB会長）とOB数人が集まり審査が行われる。

いつもと同じ基本・型・組手を二人又は三人で審査員の前で演じる。全審査が終わってから1時間位外で待っていると、審査結果が全員に発表される。

7月10日で前期が終わり、次の週の月曜日から『夏合宿』が始まる。これが1年間で1番厳しい合宿で、稽古は5日間、1日3回稽古で、1回は2時間、全て食事前に行く。中日は昼にマラソンで遠出して、昼は西瓜を食べて稽古無し。

また、夏合宿は、外へ出ると言う事で、この年は知多半島の大野海岸のお寺※2の本堂（床はコンクリート製…2年前の高山での夏合宿では木製の床が相当傷んだとの事）を借りて行われる事になった。

朝稽古は名古屋大学の教官である渡辺先輩が声をかけ、指導を受けた。先輩は朝食後名大へ出勤された。

豊田主将からは合宿が始まる前に部員に、①お寺の建物と三度の食事については何も苦情を言うな②合宿中は海水浴禁止（お寺は海水浴場近く）③禁酒・禁煙、と言う話があった。

夏合宿は始まり、毎稽古の最初と最後はいつもと同じ巻き藁突き、そして基本・組手・型であったが、2日目か3日目の朝稽古だったかはっきりしないが、突きが始まってからちっとも終わらないので1時間くらい続けていたら、やっと終わり、今度は蹴りが始まりこれもずっと続けられ、やっと終わったと思ったら7時頃で、これが言われていた『千本突き』『千本蹴り』であった。身体がへとへとになっていた。

稽古、食事、昼寝の繰り返しで4日が過ぎ、5日目の夕稽古の最後は1年生の試し割となり、それまで昼間に陽射しに置いてあった板を一人3枚割ると言う事になった。自分は、その3枚がなかなか割れず、右手の中指の付け根が3倍位に膨れてしまって、猿臂で割って終わった。

5日目の夕食は合宿の打ち上げであった。それまで禁止であった禁酒・禁煙も解除となり、酒宴となった。皆、一同にあれ迄言われていた夏合宿を乗り越えたと言う達成感で一杯であった。

※1 当時の入部者は30数名 ※2 知多半島大野海岸『萬松山齋年寺』



① 黒田	① 副島	① 池田	① 梶谷	① 山本
② 船原	① 大久保	② 山崎	① 浅井	② 正岡
① 田中	① 山内	① 藤原	① 松永	③ 福島
③ 村田	① 山田	① 森川	① 伊藤	④ 大谷
④ 関屋	③ 沢田	③ 渡辺	④ 川島	
	④ 最相	③ 豊田		

昇級昇段審査の結果待ち

（体育館東側の斜面…向こうはテニスコート）丸数字は学年

工業会館と「ごきそ」の思い出ほか

(一社)名古屋工業会 理事 大鹿 秀正 (F47)

ごきそ500号おめでとうございます。ごきそ第1号は筆者が名工大に入学した昭和43年より1年前の昭和42年6月に名古屋工業会「会誌」として発刊され、昭和45年のごきそへの改題を経て、53年間に渡る発行が続き今に至っています。工業会館の思い出ほかの投稿を依頼いただいたのは令和2年12月9日でした。

工業会館の思い出

母校に工業会館ができた昭和51年は社会人となって2年目でした。工業会館は、たまに「ごきそ」の表紙で見かける程度だったのですが、身近な存在と筆者が意識したのは母校創立100周年事業のときからでした。

工業会館の思い出の一番は、個人的に平成31年度の「名古屋支部あるべき姿検討会」だったので、少し紹介させていただきます。その年度、筆者は名古屋支部長として2年目で、名古屋支部のあるべき姿を描くことが検討会の目的でした。

平成30年3月29日から平成31年2月7日まで計5回の会合（1時間半から2時間）で、各単科会の代表11名に18時半から工業会館4F大会議室に集まってもらいました。

検討会のきっかけは前々支部長の加川純一（K49）さんからの「名古屋支部は運営を各単科会が持ち回りで担当してきている。課題も見えてきたので、持ち回りの2巡目が終わるまでに次の3巡目からどうしていくかを考えてほしい」という一言でした。

検討会では、メンバーの皆さんからの“単科会同士の共通点及び違いについて”の意見交換からいくつかの“問題提起”がありました。定例の連絡幹事会とは別に時間をとっていただいた、メンバーの皆さんと事務局担当の物理工学科（現）米谷昭彦先生（F60）には心から感謝しています。

1回目の会合では、（1）名古屋支部の将来を一緒に考えよう（2）同窓会の目的を再確認しよう（3）名工大及び工業会の変化に合わせて知恵を出そう、と3つの呼びかけをしました。“支部の運営”に焦点を絞り、“あるべき”という強い表現でなく、“ありたい”ぐらいの、気楽な本音の話し合いがスタートできたと思えたものでした。

とくに議論の方針を定めないうりかたで、現状の支部運営方法の問題点、何が困るか、若手会員の参加を増やすにはどうしたらよいかなどアンケート方式で協力してもらい、本部から内藤克己（A42）常務理事にもアドバイザーとして参加いただきました。東京支部大阪支部の運営方法も参考になりました。

検討会最終まとめが、令和3年度からの3巡目支部運営の方向性となりました。（1）支部長は持ち回りを原則とするが、行事担当は全単科会で分担すること（2）名古屋支部は名工大、工業会本部、若手会員それぞれとの連携を大切にすること

この2点をなんとか平成31年4月17日総幹事会に答申することができました。

一番の成果は各単科会の事情、それぞれの違い、共通課題の認識が前進したことです。

検討会のほぼ1年を通じて支部長として感じたのは、各単科会の皆さんの、「支え合うと同時にお互



写真1) 2回目の検討会会合
(工業会館入口で看板は幹事会)

いに相手を分かり合う」という気持ちでした。

名古屋支部と本部が今後しっかりと連携していく組織になってもらうこと。それを見守らせていただきたいと思います。検討会メンバーだった、現名古屋支部長の仁科健先生（B50）が、連携を意識した支部運営を進めておられます。工業会館で11人と熱く語り合った日々を思い出します。

令和3年度からの3巡目の支部運営担当のCE会にはコロナ禍での新しいスタートで大変でしょうが、全学同窓会へ向けて、本部や名工大とより一層連携を深めていただくように心からエールを送ります。

会合開始前より早く会場入りして、議長の筆者にアドバイスを送ってくれていたのがメンバーだった巴会の大西一君（M49）でした。彼が令和元年になった10月に急逝されたのは、名古屋支部行事の養命酒工場見学会と一緒に参加して「じゃあまた」と別れた日のまさに次の日のことでした。

名工大でもトヨタでも1年後輩だった彼に初めて出会ったのは、昭和51年トヨタ職域会の新入社員紹介式でした。心からご冥福をお祈りいたします。

ごきその思い出

ごきそ200号の1986年2月号はB5判で、毎月発行でした。平成12、13年度の編集委員長をされていた故戸莉吉孝先生（F39）が毎月発行をできれば隔月発行にしたいと語っておられました。会員の皆さんと編集委員の皆さんのご意見で、平成14年7月から隔月発行になったようです。

A4判に拡大されたのがいつかは知りませんが、手元にあったごきそ400号の2004年7・8月号はA4判でした。

ごきそ478号2017年7－8月号で、初めて筆者の撮影写真「龍ヶ池越しに見た工業会館」が表紙を飾ったときは嬉しかった。この写真を撮った日は鶴舞駅から鶴舞公園を通過、工業会館へ行くまで絶好の行楽日和でした。たまたま空の色よりも青々とした池の色と鏡のように映った工業会館に感動して夢中でシャッターボタンを押しました。

工業会館ができた昭和51年以降、少なくともあと3回以上はカラーの工業会館の写真が表紙になっています。

工業会館 有難う！そしてさようなら！「ごきそ」 ありがとう！これからも頑張ってください！

名古屋工業会と親子の恩師の思い出

父が名古屋高等工業高校に入学してから25年後に筆者は名工大計測工学科に入学しました。筆者が計測工学科を志望したのは、名工専数学科で学んだ父の影響もあったと思います。

父は太平洋戦争真只中の昭和18年に名古屋工業専門学校数学科に入学しました。

昭和18年4月3日付けの“名古屋臨時教員養成所入学許可証”を見つけたのは、名古屋の実家を片付け中の令和3年1月になってからのことでした。許可証には「名古屋高等工業高校」としっかり明記されて



写真2) ごきその変遷 左が200号
右の表紙は2017年の工業会館

いました。

「四月十二日午前八時二十分出校講堂ニ参集スベシ」と太い文字があり、「別紙就学届ニ記名捺印ノ上大至急本校教務課ニ差出スベシ」との注意書きもありました。

時代は変わりましたが、今の名工大生も新型コロナとの戦いで不自由な学生生活を余儀なくされています。

いつの時代も、先生から教え子、先輩から後輩への応援の気持ちは変わらないと思います。

父のアルバムには“大東亜戦争”と書いてありましたが、軍服姿などの教授9名と数学科同期の71名の写真が貼ってありました。その中にあった計測工学科初代主任教授だった依田浩先生の写真と武豊農場での父の写真、そして当時の寮があった富貴の田植え前の地ならしの写真をアルバムからコピーしました。(写真4,5,6) 3枚の写真はいずれも昭和19年撮影です。当時の学生生活が偲ばれます。



写真3) 昭和18年4月の校門
(父大鹿桂一のアルバムから)



写真4) 依田浩教授



写真5) 武豊農場にて



写真6) 田植え前の地ならし

父の卒業50周年に筆者は父を無理やり、名古屋工業会総会にさそい、懐かしい母校を見た父がほんとに嬉しそうだったことを思い出します。そのあと、親子共通の恩師だった依田先生を訪問する機会を失ったことが心残りです。

平成18年1月に依田先生が亡くなられたとき、筆者は1月19日から入院中だった父の想いも込めて、依田先生の葬儀に出席させていただきました。先生の後を追うように、父は入院からちょうど3か月後、81歳で亡くなりました。父と学生時代から交流のあったDF会幹事渡辺秋義様(㊟18)のお名前を平成20年ごろまでずっとごきそで見ながら、筆者は励まされたものでした。

“DF会”も“翼会”もごきそに登場することがなくなりました。名古屋工業会の伝統と歴史を感じます。

各単科会の良いところをバランスよく取り入れて、名古屋工業会と各単科会ほか同窓会組織が卒業生と名工大及び名工大生にとってより良いしくみになることを、そして全学同窓会として発展することをお祈り申し上げます。

大学入学時の思い出

(一社)名古屋工業会 理事 森 秀樹 (D52)

昭和48年春、入学試験のためにくぐった正門、キャンパスのところどころに、何かが書いてあったのか定かではないが、学生運動のシンボルであった大きな看板が立て掛けられていたことが記憶に残っている。

講義が始まると、高校までの授業の内容・進め方との違いにショックを受けたことを今でも覚えている。解析学では「 ε - δ 論法」による定理の証明に面喰った。O先生の授業は大学1年生に向って「歯医者では前の医者による治療跡を見て、その腕の良し悪しが分かるが、たとえ下手であっても批判しない」という内容の話から始まった。研究論文は先に発表された論文を批判しながら書かれることが多いが、研究者はもっとオリジナリティの高い研究をすべきと、示唆していた。B先生は、臭いにおいの代表でもあるインドールも濃度が薄くなると芳香になり、高級な香水にも極微量含まれていること、子供を喰う鬼を憐れんで、お釈迦様が代わりに味が似ているザクロの実を食べさせたとの鬼子母神とザクロの由来（俗説のようである）を交えて、天然物中に含まれる化合物を説明されていた。K先生の試験は、「なんでも持ち込み可」であったが、当然、答えは探しても見つからず、私も含めて多くの学生が単位を落とし、甘さを痛感させられた。

半世紀近く経ても、当時の思い出とともに個性豊かな先生方の含蓄のある言葉が鮮明に蘇えってくる。

名工大で出会った生涯の金言

(一社)名古屋工業会 監事 水谷 尚美 (D42)

1963年の3月期待と不安の中、講堂に張り出された合格者発表の中に自分の入試番号を見つけた時の感激、その日から半世紀以上の時間が経ったというのに、昨日の出来事のように何とも不思議な気がしています。

楽しい学生生活の中でも、最も思い出深いのは3年生の時経験した工大祭でした。工業化学科の実行委員長として、仲間と夜遅くまで時には徹夜をして準備をしました。研究室の一般公開で近所の人を迎えたり、仮装行列で鶴舞から栄まで練り歩いたり、中でも、クライマックスのファイアーストームの炎は青春のエネルギーそのものだったと、今も懐かしく思い出します。

その工大祭の準備の過程で、自分にとって生涯忘れることのできない言葉に出会いました。それは『作る(創る)ことによって知ることが大切である』という何の変哲もない一言です。でも、工学を志すものとして、知らないとか分からないではなく、調べてみよう行動してみようと諭されているようで、技術を志す者のスタートラインのような気がしました。

社会人となってからも、この言葉は成功への糧となったように思います。入社3年目に米国に派遣され以来、延べ20年以上を海外での新規事業の販売拠点や現地生産拠点の構築に携わることになりました。新規客先の開拓、現地生産拠点の設立など、難しい課題に直面するたびにいつもこの『作ることによって知ることが大切である』を思い起こし、チャレンジングに業務に邁進できたような気がします。

その後、縁あって名工大の経営協議会学外委員、非常勤理事、名工大研究協力会会長、更には名古屋工業会の役員として、少しは大学に恩返しをさせて頂けたのではと思う今日此の頃です。

名古屋工業会及び工業会館の思い出

(一社)名古屋工業会 監事 川村 信之 (E53)

1978年に大学（電気工学科）を卒業し、地元名古屋の企業（中部電力）に職を得た関係から大学との橋渡し役として、最初は単科会（電影会）の学年連絡幹事、その後は電影会本部役員・会長として参加・活動するようになりました。その後の私にとっての転機は、大先輩からの引継ぎで電影会選出の工業会役員をさせて頂く様になった事です。これで全学同窓会（名古屋工業会）との関係ができ、30年近く務めさせて頂いています。単科会としての限られた活動に対し、工業会は全学を代表するという事で大学との関係も直接的となり、数多の変化（大学自身の法人・学制改革、工業会の大規模組織変更）等を私自身が直接垣間見る事ができました。

これらの中で思い出に残るイベントが2つありました。1つ目は、大学との全面協力で実施した『100周年記念募金・記念事業』で、2つ目は、工業会自身の全面組織変更（『一般社団法人化』）・工業会財政安定化事業（『新入学生の工業会会員への全入化』）です。

1つ目の大学創立「100周年記念募金・事業」は、それ迄の80・90周年の周年事業とは異なり1世紀越えを達成した記念すべき年に当たり、大学も同窓会側も単科会・全学問わず一丸となって目標額到達活動に努めました。その結果、予想をはるかに超える成果を上げることができ、協力の成果の記念事業として校友会館（旧三協会館を大改修し、大学・学生・OB会産業界が利用できる交流会館）を建設する事ができた事です。この会館は、奇しくも現工業会館の立て替え移転先として昨年から利用が始まっており、大学組織と全学同窓会組織（名古屋工業会）の密接な組織連携のシンボルとなっています。

2つ目は、大学・工業会の全面協力の賜物である「工業会一般社団法人化」と「新入学生の工業会会員全入化事業」による工業会財政の安定化への貢献です。工業会も法人格を公益社団法人から一般社団法人へ変更する、単なる「衣の付け替え」とはせず、法人の第1の目的を「大学への支援」を主眼に変革し、新入学生の工業会会員全入化をこの機に実現しました。これにより大学支援も変革前に比較し何倍層も拡充が可能となり、大学連携がより緊密となりました。

大学卒業後も、工業会・工業会館を通して大学と同窓会の深い絆構築に関われた事は、私にとり得難い経験となりました。



4年間の学生生活断片

本学第1回卒業生 船橋 鉦一 (M28)

○愛知工業大学への入学出願

昭和20年前半、敗戦に伴いわが国の学制制度は大改革された。いわゆる6・3・3・4の制度である。義務教育となった新制中学校の設立に伴い修業年限5年の旧制中学校・旧制高等女学校などは併合などされ、校名も新しい修学年数3年の新制高等学校が誕生した。昭和23年4月のことである。しかし、昭和23年度には未だ旧制高等学校・専門学校の学生募集は行われ、新旧両制度が併存した。そして昭和24年度に旧制高校が廃校となり在學生は改めて新制大学を受験することになった。

本学要覧によれば、「昭和23年1月、進学適性検査（大学入学共通テストの源流）実施。昭和24年2月、名工専、愛知県立工専連絡会議開催。昭和24年5月31日 国立学校設置法が公布、同日、名工専、愛工専は合併、新制名古屋工業大学が創設された。」とある。けれども、当初は愛知県資産と国有資産の関係から愛知工業大学の名称が挙げられたものと推定する。受験票には標記の大学名に志望学科名のスタンプ印があったのを保存していたが、家屋の改築時に処分してしまった。しかし同期生松浦 聖氏（故人、名誉教授が）の本学に寄贈した受験票で確認できる。

・補欠合格者について。機械工学科では愛知工専の在籍者多数が受験し、合格者は数名であったが、入学したのは10名であった。一方、名工専出身者は3名であった。これは伝統ある名工専のブランドネームが高かったためではないかと思われる。

因みに開学初期数年間学生志願倍率は現今のように偏差値など入学可能な事前予測は皆無で、志願者は玉石混交状態にあり志願倍率は相当大きく、当時からいわゆる2期校の特色顕著、多数の入学辞退者が発生していた。

入学倍率（全学）および最高志願倍率の学科と倍率

昭和25：4.93 (3) D：8.35 昭和27：7.90 (0) M：12.3

昭和26：5.76 (1) D：8.07 昭和28：9.11 (1) E：14.0 () は女子入学生、内数

○名古屋工業大学第1回入学式

昭和24年7月11日、挙行。入学許可者321名。会場は名古屋大学医学部講堂と記憶する。

授業料は年額金3,000円（昭和27年度入学生から6,000円に改正）

○『学修の指針』

青色の謄写版刷りの薄っぺらなガイダンス資料が手渡された。卒業条件のひとつ一般教養科目の36単位必須が今も記憶に残る。

これについて少し補足する。新制大学における一般教育は専門教育の準備的のものでなく、専門教育と同等の段階と同等の価値を与えられるもので、両者は総合されてよき社会人としての人間形成に役立つことが期待されているとある。しかし一般教育はある時期に終了して、その後でなければ専門教育が行われないというやり方、旧制高校時の一般教育に後退してはならない。これでは折角の教育制度改革の目的が達せられない。また、有効な一般教育を強化して単位数を多くすることは考えない。これが当時日本工業教育界の要職に在った、本学学長清水勲二先生の方針で、能率的でしかも有効な教育方法を採用することが望ましいとされている。かような指針に基づいて本学のカリキュラムは出来上がったものと思われる。

○一般教養科目

人文科学系列（哲学、文学、心理学、教育学）

社会科学系列（経済学、社会学、社会政策、法律学、統計学）

自然科学系列（数学、物理学、化学、地学、生物学）

各系列それぞれ3科目、12単位以上、合計9科目、36単位以上を取得しなければならない。

- ・外国語

2ヶ国以上、英語4単位は必修、計6単位が必修。

- ・体育科目

講義、実技ともに2単位計4単位が必修。

講義は毎週1時間、演習及び外国語は毎週2時間、実験、実習、製図及び体育実技は毎週3時間、各学期（15週）の学修をもって1単位とする。

○教材などの購入

戦後の復興途上で思わしい書籍の新刊はままならぬ時代である。束ねて購入したのは機械工学便覧（分冊11冊）のほか僅かであった。製図器具は高価であった。計算尺も必需品。さしあたっては夏期休暇である。

○通学

授業は北千種町の分校（週4日）、と御器所町の本校（週2日）で開講される。当時の通学定期券は券面に市電の全路線図が印刷されており、乗車経路が自宅最寄の電停と本校（大学病院前）と分校（古出来町）の経路を赤ペンでなぞった3又の券が発売されていた。当時の料金は1乗車8円均一で、学生定期券の方が授業料より高額であった。

私の市電利用の経路は広小路線を東進、今池で乗換、トロリーバスで古出来町下車、千種分校に到着。一方、本校へは新栄町乗換、大学病院前下車である。この電停はいま名大病院西の信号機少し北寄りであった。路線跡の道路は今も残っておりこんな狭い道幅でよくも電車が通っていたかと驚かされる。

ある時、友人二人での通学途上、名大病院脇で会話を楽しみながら歩いているとT先生に「体格の悪い君たちみたいなのが長生きするんだらうな」と言われて追い抜かれたことを覚えている。確かに二人は現在も生き長らえている。学生数40名に対し機械工学科所属の職員は27名、学生数と教職員数の割合から言っても非常に近親感が持てた。

○一般教育科目の教室風景

- ・富田嘉郎教授の社会学

千種分校の教室の多くは松林に囲まれ、やや薄暗いような環境にあった。授業始めの行事は出欠調査である。毎度名字が呼ばれるので新入生にとって互いに姓を知る手助けになる。しかし、代返の弊も免れない。入学早々、社会学の授業であった。薄暗い教室、他学科との合併授業、大勢の中でS君がY君の代返をした。Y君の名は読みづらい。富田教授に代返を咎められたかと周りのものは、はらはらしたが、Y君の名の呼び方を尋ねられただけで、すらすら答えて事なきをえた。彼らは同じ出身高校で、我ら同級生一同もむつかしい彼の名をここで知ることが出来た。社会学の講義内容は殆ど覚えていない。ただひとつ、芸術・科学・文学など精魂込めて励むと性欲が減退するという説を覚えた。

- ・寺澤正雄教授の経済学

聴講の際は何となくわかった気がするが、それを自分の手で書きとどめようとしても、用語その他表現上どうしようもないことを痛感した。ただケインズの経済学という概念は教え込まれて記憶に残っているが、私が文系に不向きなことを悟った。

- ・川瀬知行教授の文学

万葉集から近代までの文学思想の歴史が述べられ、巧みな書体の板書が記憶に残る。

- ・高橋進一教授の数学

高校生向きのような教材が与えられ、新しい教育指針に基づく方式が採用。つまり講義の前後の合間

に空き時間を設けた形態である。しかし、結局、いつの間にか廃止された。先生からは後に専門科目としての工業数学の講義も受けた。期末試験の時間が無制限であった事。薄暗くなり、もう観念しろと言われて全員が答案を提出したことを思い出す。

・一ノ瀬正巳教授の物理学

力学の講義は根底を極める名講義であった。しかし、先生は講義中に時々激しい腹痛を訴えて退席することがあった。胃癌であった。助手（当時）の井上勉先生が献血依頼に来られ、また吸血鬼が来たとの陰口が聞こえた。後日、先生による出題最後の試験が課せられ単位を取得した。

・化学実験と物理学実験

溶液の定性分析の手法を学んだ。担当は屋代雄三助教授（当時）となっていたが、実質は金森 昭助手（後の田中教授）で時間が長引くとその間に“あみだくじ”をしてコッペパン（当時“チョコサン”と称していた。由来はチョコレートが挟まれていたためかと思う）を買い出しにいったりした。時間を要したが分析結果を報告すれば良いので“らく”であった。一方、物理学実験は翌週のレポート提出が負担であった。担当は石井謙一郎助教授（当時）であった。

・外国語

語学が不得意なせいかわかりにくい。ただドイツ語について、当時発行の辞書は厚いこわばった紙質でまことに引きにくい。語彙ほとんどが分からないのでその全てを引くのは大変であった。教材は作者名を思い出せないが「チリの地震」と覚えている。ページの全面に延々と連なる長文を和訳するのは苦勞そのものである。誰かが岩波文庫の翻訳書を発見した。お陰で原文と名訳とが対照でき、それなりの素人訳が出来上がった。英語は当時の定期刊行誌「リーダーズダイジェスト」を拾い読みしたような不確かな記憶しかない。失礼ながら担当の先生のお名前も浮かばない。

・体育講義

非常勤講師として名古屋大学の鯉沼茆吾先生から学んだ。環境の悪い下地が見えるような黒板を背に、公害につながる呼吸器の話など、寒中で、互いにコートを着たまの授業であった。コートと言えば衣料品も払底、右胸にポケットがある代物がある。これは古着を裏返して仕立て直したもので、まことに厳しい世相である。革靴など高嶺の花である。

・体育実技

何をしたかさっぱり覚えがない。運動が抜群に不得手な者にも小学校以来、初めて“優”がついた。

○専門科目（その1）

機械工学科では一年次に2-3の座学と設計製図、実習（機械工作）があった。

・設計製図

各種の機械はそれぞれに“美”が宿っている。「先ずは美を意識して諸機械の外観をスケッチせよ」。とのこと（小川義朗教授）。ケント紙に“家庭用ミシン”のデッサンをした覚えがある。次は墨入れ。用具は“烏口”という所定幅の墨線を描く器具で、現在は死滅？した用具である。用具と墨滴の表面張力との戦いであった。学年が進むにつれ、クレーンの設計、今は全く廃れたリベット継手の強度計算に基づくボイラーの設計、ポンプの設計などが課せられた。提出期限は厳しい。受注した仕事の期限は遵守すべしという躰である。提出期限時刻に間に合うようにK君は電停から下駄を脱ぎ捨て裸足で駆け込み、首尾よく提出できたという逸話もある。提出期限近くでは多くが製図室で徹夜したことも多いが、この室は憩いの場所でもあった。碁盤や将棋盤を持込み、リーグ戦をしたこともある。

・機械工作実習

その頃の学風は生産現場ですぐ役立つ技術者の養成がモットーであった。予算の少ない中で、実習に力点を置く教育とはとても言えない。敗戦により米軍が接収したわが国軍事工場設備が払下げられ、

貰い受けた工作機械が多数を占めていたのではないかと思います。部品が傷つき欠損したりして、直ぐには使えない機械が散在していた。据付、分解整備、補修が必要である。実習は移動、運搬、据付、分解、清掃もその一環であった。しかし、一応は旋削実習、溶接、銑鉄の溶解・鋳込み実習など多種の体験が得られた。設計製図と実習は現在に比べて多くの必修単位が課せられていた。

○専門科目（その2）

科目数も多いので少数の偏った科目に留める。

・材料力学

岡田 収教授の講義はむつかしい中に伊勢寄りのイントネーションが混ざって心地よい眠りを誘った。先生自ら音楽的と自賛されていた。テストは厳しく全員が再試験を課せられたこともあった。

・熱力学

山田治夫教授、講義の導入に何かの話題を発せられていた。当時のラジオ番組タレントの堀内敬三氏はMLTの出身であるとかもそこで知った。気体の断熱変化の教材に、幾度もゴム風船を膨らませるうち、気分を害され講義は打切りとなった。巷で冷暖房が完備しているのはパチンコ屋と美容院などであるのは実に情けない。「冷房室の隣りに浴場を作ったらよい」なども熱サイクルの講義のひとコマである。君たちは計算尺を駆使して2桁の有効数字を出す優れた技能者たれ。この発言にクラス全員が反発した。

・内燃機関

下山鉦一教授、自動車エンジンに関し、セタン価・オクタン価なる用語を覚えた。本校試作自動車の紹介も話題になった。先生は皇室詠えのようなクラシックな車を愛用。研究のため足繁く京都大学に通い、心臓発作は過労のためかと推察する。その休講時にはソフトボールもどきを楽しんだ。

・電気工学概論

坂田弘講師（当時）と武藤三郎助教授（当時、元本学学長）であった。他学科所属の先生にはあまり興を持たないが、坂田先生の感電の怖さ、武藤先生の三相交流の実効値を思い出す。

・機械工作

佐藤申一講師（当時）、国鉄名古屋工場長を退職し本学に奉職された。先生の研究室前を通るといつも手回し計算機の音がしていた。歯車の研究一筋であったが、教員の均等な担当時間配分のためか、機構学の講義を受ける機会はなかった。計算の手を休めたときは微分幾何学の書を読んでいると仰せられていた。選択科目に鐵道車両の講義もあった。線路の緩和曲線、脱線の仕組みに記憶がある。

・機械要素

小川義朗教授、著書「機械設計法」は著名であるが新版は得られない。授業の都度、ガリ版刷りの教材が配布された。当時はガリ版印刷で渡世している店もあったが、先生自らの刷りはそれを凌ぐ素晴らしいもので今も保存している。

○卒業論文

当時の本学における研究活動の一端を示す資料（昭和27年度文部省科学試験研究課題一覧）*を見つけた。（ ）は交付金額 万円

山田治夫教授：新製氷方式の研究（15）

屋代雄三助教授：接触電位差測定による金属接触面の研究（50）

三好保憲教授：コロナ放電に関する研究（70）

荒井利一郎教授：円筒体状構造物の力学に関する理論的及び実験的研究（70）

竹島卓一教授：法隆寺出土瓦の質的研究（50）

広川誠三郎教授：建築における版構造の理論的並びに実験的研究（50）

小島武夫教授：極射撮影法に関する研究（80）

矢島悦次郎教授：鋼の二、三の脆性についての研究（90）

成瀬 省教授：酸化鉄に関する窯業工学的研究（80）

進藤益男教授：接触反応及び化学反応を伴う吸収（60）

旧帝大を除けば本学の採択数は抜群である。

機械工学科の卒業研究はひとつのテーマに1名ないし数名が取組んだ。テーマによっては骨格となる試験装置もあったが、多くは現在のホームセンターで求められるような物品材料さえも苦勞して調達し、実習工場の職員のお世話になった。その他、力学的理論計算やオートバイの設計など非実験的テーマもあった。

卒業論文は手書き、正副2通の提出が求められた。複写技術などなく挿入図は青焼き（依頼して作成）や写真を貼付けた。2人の協同論文は4部出来るので、諮問時にはその4部が回読される。論文の説明用ビラを用意した覚えはない。

○就職活動

就職は大いに不安であった。朝鮮戦争が勃発し国内の景気は徐々に上昇したと現在の書には記されているが当時はその実感が無い。トヨタ自動車は公的求人をしていない。取れる資格は何でも取りたいという状況である。高校教諭工業2級の免許を得るため愛知県立工業高校へ教育実習に多数が出かけた。今にして思えば本学の先輩である諸先生から指導を受け、大変なご負担にもかかわらず、温かくご指導を給わったことに感謝しなければならない。ここで初めてテーブ録音機の体験をした。

受けらる試験は何でも受けよう主義で、国家公務員採用試験に挑戦。幾度かの関門を経て当時6級職と称する上級試験の最終試験(機械職)に受かった。通知書には51名中37番が明記されていた。ここから各省庁の面接試験が始まる。面接で、「なぜこんなに選択単位数を取っているのか」と言われたが、首尾よく内定を得た。顔見知りの土木工学科生からひどく羨まれた。その頃は就職試験・面接の後、近辺で興信所がやってきたという噂が伝わると内定通知が電信や速達便で届く。個人情報保護などあるものでない時代。年越しまでに内定を得たいと願った時代であった。未だ米穀通帳が幅を利かし、外食には自治体発行の食券が必要であった。入学当初、鶴舞公園は全て米軍に接収されており、高いフェンス越しに見える赤茶色のコートでテニスをする金髪女性の姿が眩しかった。学年が進むうち、公園の接収範囲は狭まり、卒業間際には噴水塔前で写真が撮れた。遡るが、2年生在学中の昭和25年10月に第5回国体が愛知県で開催され、大久手から桜山まで市電が敷設、トロリーバスは姿を消した。金山の新設体育館で数日間、級友と競技後の館内清掃アルバイトをした。わが国経済成長の黎明期であった。

○昭和28年3月15日、第1回卒業式挙行

会場は旧電気工学科3階。入学許可者321名のうち卒業は272名であった。機械工学科では入学者40名中、37名が卒業した。卒業証書を納める紙筒は与えられない時代である。貧しいが、希望に満ちた時代であった。



卒業証書を手にした全員写真

*工業教育,1,1（昭和28.4）140.

名古屋工業大学教務部 昭和27年度 学生便覧
名古屋工業大学要覧 昭和28年度

同じ汗をかくなら、「世界No.1」を目指そう～あなたへのエール

株式会社 ワールドテック 代表取締役 寺倉 修 (F50)

「ごきそ」との縁

会誌「ごきそ」500号発刊おめでとうございます。

ごきそとのご縁ですが、**弊社の広告を掲載いただき10年近くなります**。裏表紙の広告欄です。2016年には「交流コーナー」に「設計力」と題して投稿しています。さらにさかのぼれば、2009年の夏、名古屋工業会館で「名工大OB企業創設者座談会」が催され、企業創業経験者の一人として参加、その座談会の様子がごきそに掲載されました。などなど。



名古屋工業会館で
「名工大OB企業創設者座談会」2009年夏
右から3人目矢印が筆者

開発設計はチャレンジと失敗の連続

さて、会誌名がごきそへ改題された翌年、昭和46年の受験会場。木造の床がミシミシと不安を^{あお}煽った。建屋は東門の付近にあった。今は駐車場。その場所に車を停めると、思いは走馬灯。

入学式の日、乗馬クラブの声に誘われ、馬にまたがり「良い眺めー」。気がつけば、旧講堂（今はNITech Hallに一新）。壇上では、席順筆頭のA君が、右代表で計測工学科卒業証書を受領していた。

父が経営する町工場で3年。その後、計測科恩師にご尽力賜り、デンソー（当時、日本電装）で自動車部品の開発設計のスタートを切りました。30年近くに及ぶ、怒涛の日々の始まりでした。

こうでした。開発設計についていくのに四苦八苦（まさに波また濤）。何年か経つと、無謀にも新技術を見出し、それを製品化するという、チャレンジにのめりこんだのです。新製品の開発というと誰々君と、言われていたとかいないとか。

数多くの製品を手掛けましたが、失敗の連続。「**チャレンジは失敗がなければ、成功もおぼつかない**」「チャレンジしなければ失敗もない、鳴かず飛ばずということだ」と自分で納得の日々。

運よくというか、素晴らしい上司に恵まれ、前向きな失敗は加点評価（だっと思ったんですが）。かなり自由に、やりたい開発が行えました。24時間、365日、開発設計（決して褒めたことではない）のような日々。

53歳で、宮仕えから足を洗い独立。脱サラは創業3年でつぶれるとの定石から逃げるべく、毎日終電。時間だけが平等でした。

今は、100名のデンソーなどのOBと共に、**ものづくりのボトムアップに取り組んでいます**。弊社のビジョンは、「新たな価値と感動を想像し、素晴らしい笑顔と生き甲斐を、全ての中高年に実現する」。

巻頭で述べましたが、ごきそに弊社の広告を継続しています。多くの方に支えられてきたお蔭と、感謝の限りです。

「世界No.1」を目指そう

ここまでお読みいただいた方にも感謝。しかし、後輩の方々や学生諸子に、お伝えしたいことはここからです。もう少し我慢してお読み願います。

上記のように、開発設計は失敗の連続でしたが、多くのことを学びました。むしろ、悟ったと言うのがしっくりきます。その中の一つが、このタイトル「同じ汗をかくなら、世界No.1を目指そう」です。こういうことです。**ものづくりは、自分の思いをもので表現し、お客様の笑顔を実現する。やりがいのいっぱい詰まった世界です。**だが、楽ではありません。同じ汗をかくなら、地域、日本、いや世界No.1（品質やコストがダントツ）製品を目指して欲しいと思います。

あなたは、世界No.1を目指して取り組める立ち位置にいるのです。あなたの思いこそが、世界No.1になるかどうかの鍵です。**「世界No.1を目指そう」ということ、それがスタートラインを切ることです。**逆に、あなたがそのように思わなければ、世界No.1は地平線の^{あなた}彼方に遠のいていきます。

世界No.1は大げさなことではありません。身近な取り組みです。私は経験しましたが、コイン1、2枚のコストでできる、部品点数が少ない簡単な技術から成るものでも、世界No.1を狙えるのです。

担当している製品を、世界No.1にするという思いを持って見てください。きっとものはあなたに語り掛けます。世界No.1の切り口を。

世界No.1を目指しても、達成できるとは限りません。しかし、たとえ達成できなくとも落胆することはないのです。そのチャレンジは次の取り組みの糧になります。それは、あなた自身を成長させ、次の取り組みを成功させる原動力になるのです。

実際に世界No.1製品を目指した人、あるいは、より良いものを世の中に出そうと情熱を持ち、新たな目標に向かってチャレンジした人で、現在は当社メンバーの方々に聞きました。ものづくりにはどのような姿勢や心構えが大切かを。取り組んだ部品や製品は違っても、ものづくりへの思いは、皆同じでした。それは、「常識にとらわれない/事実をしっかり把握する/自分で考え抜く/できない理由ではなく、どうしたらできるかを考える/まずはやってみる/失敗を恐れず、チャレンジする/失敗は貴重な財産、多くを学ぶ/迷ったときは、苦しいほうを選べ…」

奇をてらうような言葉は、一つもありません。誰もが聞いたことがあり、そうありたいと思っている言葉ばかりです。

「ものづくりの本質」が、これらの言葉に隠れています。ものづくりとは、特別な取り組みを行う場ではなく、目標を高く掲げ、原理・原則に^{のっと}則って、地道に、着実に、一步一步、すなわち愚直に取り組むものと、私は信じます。このような思いを持って、あなたは世界No.1を目指して欲しいのです。なぜ世界No.1を狙うのか。「そこに世界No.1があるから」です。

最後になりましたが、**名工大出身者の世界への挑戦と活躍を願っています。**

■筆者紹介

1975年 名古屋工業大学計測工学科 卒業
1978年 株式会社 デンソー（当時 日本電装）入社
2005年 株式会社 ワールドテック 代表取締役
現在に至る

●著書

- ・「設計力」こそが品質を決める（2020第9刷）
- ・「設計力」を支えるデザインレビューの実際（2018第4刷）
- ・「設計力」こそがダントツ製品を生み出す（2018）以上、日刊工業新聞社
- ・開発設計の教科書（2019）日経BP社

●日経 x TECHコラムに、「設計力の魂」を連載中（第78回目掲載済み）

<https://tech.nikkeibp.co.jp/atcl/nxt/column/18/00036/>

●中部経済新聞に、「設計力」を連載中（第42回目掲載済み）



名古屋工業会館と同じときを過ごして

(一社)名古屋工業会 事務局長 三田 晴伸

私は、名工大卒業生ではありませんが、本会の特別会員として、名古屋工業会館の建っていた44年間の大学のことについて書かせていただきます。と申しますのは、私は、昭和51年（1976年）、文部事務官として名古屋工業大学に採用されました。この年に名古屋工業会館が竣工し、奇しくも、今、名古屋工業会館の解体に関する事務に関わらせていただいています。何のご縁か、私が奉職してきた期間と会館の建っていた期間とがほぼ重なっておりますので、私のような者が紙面を汚すのは申し訳ありませんが、この間の大学の在り様について、内にいた者の目から「報告」させていただきます。

名古屋工業大学に奉職して

最初に私のことに少し触れさせていただきます。私は、就職超氷河期の昭和51年に採用していただき、最初に材料開発研究施設（昭和60年に廃止、現在の21号館にあった。）に配属され、建築系の大岸先生、化学系の横田先生、窯業系の福尾先生、金属系の山田先生、森山先生、高分子系の柏原先生など、多くの教官にお世話になりました。多様な分野の研究者が「材料開発」という共通の目標でどのように研究していくのか、議論されていたことを思い出します。当時の同施設の学生は研究熱心で、何としてもデータを取ろうと、研究装置の横で寝起きしていました。この中には後に本学の建築の教授になられたIさんや、岐阜大学の工業化学系の教授になられたMさんなど立派な方がおられました。私は、その学生たちと深夜まで、お話をさせていただきました。

その後、大学本部に人事異動し、経理系、教務系、総務系、企画系などを回り、退職し、再雇用とともに現職についています。

名工大の良き先輩、後輩にご指導を受け、ともに働いてこられたことに感謝しております。

名古屋工業会館が建っていた期間の大学

博士課程の設置

さて、大学創設のころと大学紛争のころを除いて、名工大にとって最もエポックメイキングな出来事は、やはり、昭和60年（1985年）の博士課程の設置だと思います。その当時、旧帝大のように最初から博士講座が設置されていた大学を除く多くの大学で、博士課程を設置しようとしていました。文部省に認めてもらおうと、連合大学院だの何だのと「奇抜な」工夫をしていたなかで、名工大の博士課程は、学部から大学院博士前期課程・後期課程と続く「総2階建て」のオーソドックスで立派な課程になりました。当時例えば、K国立大学は、博士前期までは工学部の上に乗った構造ですが、博士後期課程は、工学部だけで支えきれず、他の学部の研究科と合併して自然科学研究科となっていました。

小学科制から大学科制へ

同窓会にとって大きな出来事として、このときから、小学科、小講座が、大学科、大講座に改組され、従来の土木、建築、…学科から応用化学、材料工学…となりました。従来の学科相当の学生単位としては、「コース」が残りました。このとき学科名の順番が、大きく変わりました。

臨時増募

その後、平成の初めごろ団塊世代2世の受け入れのため、臨時に入学定員が大きく拡大され、平成4年度（1992年度）には、第一部の入学定員は1,060名に達しました。もともと、60人×14学科＝840人を基盤にしていたため、教室が足りず、臨時の教室を教養棟（52号館）などに設けました。（因みに現在の第一部の入学定員は、910名。）

大学設置基準の大綱化

学科の改組ではありませんが、平成3年（1991年）に大学設置基準が大綱化され、名工大も平成6年度（1994年度）カリキュラムから教養教育が大きく変わりました。それまで、教養教育は、自然科学、人文科学、社会科学を均等に修得するものでしたが、このカリキュラム以降、そうした枠組みが撤廃さ

れ、さまざまな「工夫」がなされました。また、従前、教養担当だった教員のうち自然科学系の教員を中心に多数の教員が専門学科に「分属」しました。そして、教養教育（共通科目）は、専門学科も含め、全学で担当するものとして「全学出動体制」が組まれました。

法人化

そして、平成16年度（2004年度）に国立大学が法人化され、少なくとも形式上、国から独立しました。それまで、文部科学省の一機関の長でしかなかった学長が、「法人の長」として、大学に全責任を負うものとなりました。また、予算も国から委任されて、国の国立大学特別会計を執行する位置から、自ら収入を得、自ら執行することになりました。（もちろん、一定程度の収入を運営費交付金から得ていることはありますが。）

遠山プラン

このころ所謂、「遠山プラン」が出され、国立大学の合併が進められましたが、結局、そのほとんどは「一県一医大構想」のもと「新構想大学」として設置された国立医科大学が、従来からの府県単位の国立総合大学と合併するような例がほとんどでした。

改革疲れ

その後も多くの改革が進められており、「改革疲れ」となっていることも否めませんが、厳しい環境のなか、国立大学としてこれからの社会が求める人材育成をめざし、改革を続けなければ生き残れないのも事実でしょう。

私は、名工大職員として働いてきて、旧帝大などと比べ、施設、人員、予算などが厳しい環境であることを本当に腹立たしく思ってきました。そんな中で、先生方が歯を食いしばって、教育研究に勤しんでおられることに感銘を受けていました。大学の教職員の皆様には名工大のために本当にありがとうございます。

東海国立大学機構について

最近、名古屋大学と岐阜大学が合併し、東海国立大学機構を立ち上げました。名工大は、独立して経営していくことを学長が宣言されています。「名岐国立大学機構」でなく、「東海国立大学機構」と、まるで東海地方の国立大学を全部傘下に治めているかのような名称を、国が認めてしまっていることが気がかりです。

同窓会として母校を応援し、「輝く名工大」が未来永劫つづくことを願います。

44年間お疲れ様

思えば、同窓生が総意を結集して名古屋工業会館を竣工させた年が、ニクソンショック、オイルショック後の就職氷河期のピークの昭和51年でした。そして、解体工事が終わった令和3年（2021年）は、新型コロナウイルス禍です。

この建物は、そのような苦難の中で生まれ、多くの喜びと希望とそして苦悩を見つめてきたことでしょう。手放しで喜べるようなことは無かったのかもしれませんが、しかし、名古屋工業大学が、多くの優秀な学生を社会に送り出し工業会が迎え入れ、この地域をはじめ、日本、世界の産業界で活躍されたことは、そのコンクリートでできた素肌が感じ、しっかりと刻んできたことでしょう。

44年間お疲れ様でした。

同窓生をつなぐプラットフォームに

私たちは、昨年試みにZOOMにより、全国の支部をつないで支部連絡会を開催しました。人々がバーチャルな空間で顔を合わせることが、これからは多くなることでしょう。生身の人と人との想いを伝えあうことを大切にしながら、空間と時間を超えて、心の中にきっと新たな工業会館を建てていくことでしょう。

名古屋工業会は、同窓生がその心のよりどころとなり、それぞれをつないでいくプラットフォームとなっていきたいと望んでいます。

私も微力ながら、そのお手伝いをさせていただき、ありがたく感じております。

歴代役職者等年表

		理事長	常務理事	事務長・事務局長	学長
昭和42年		副田俊平			佐藤 知雄 (M十)
昭和43年					
昭和44年					森嶋宗太郎
昭和45年					
昭和46年		近藤 三郎 (C二)	染木正夫 (A15)	(渡辺事務長)	佐野 幸吉
昭和47年					
昭和48年					
昭和49年					
昭和50年					
昭和51年					
昭和52年					
昭和53年		佐藤 知雄 (M十)	北沢富士男 (W10)		武藤 三郎
昭和54年					
昭和55年					
昭和56年			加藤 向以 (Y23)		
昭和57年					
昭和58年					
昭和59年					
昭和60年		下山 鑛一 (M4)			太田 正光
昭和61年					
昭和62年		井上丈太郎 (E13)	森 眞佐雄 (K20)	夏目 ゆき	
昭和63年					
平成元年					
平成2年					
平成3年					
平成4年					吉田 弥智
平成5年					
平成6年		都築五九男 (C14)	熊崎 憲次 (E23)		
平成7年					
平成8年					
平成9年		金原 淑郎 (M25)	鮎谷 清司 (K31)		岡島 達雄
平成10年					
平成11年		藤原 俊朗 (K31)	野田 昭 (E37)	佐野 秀則	
平成12年					
平成13年					柳田 博明
平成14年					
平成15年		市川日出男 (D32)	西端 義彦 (D35)	野田 淳一	
平成16年					
平成17年					
平成18年		牛込 進 (Y33)	道家 清正 (Y30)		松井 信行 (E41)
平成19年					
平成20年					
平成21年					
平成22年		篠田 陽史 (M33)	二杵 幸夫 (K39)	加地 敏弘	高橋 実
平成23年					
平成24年					
平成25年 (新法人)					
平成26年					
平成27年		水嶋 敏夫 (M42)		森 要一	鵜飼 裕之 (F52)
平成28年					
平成29年			内藤 克己 (A43)		
平成30年					
令和元年		加川 純一 (K49)		三田 晴伸	木下 隆利 (W50)
令和2年					

名古屋工業会館

新聞記事コーナー

中日新聞

掲載日	刊	面	氏 名	所属学科等	記事タイトル(内容)
2020/12/11	朝	20	名古屋工業大学	—	生活支援へ名工大 全学生に5,000円支給
2020/12/12	朝 web	1	平田晃正	電気・機械工学専攻	来年1月の感染者、愛知の人出2割減なら感染6割 A I で名工大予測
2020/12/18	豊田版 朝	16	神取秀樹	生命・応用化学専攻	中日文化賞受賞 地元に報告 みよし 神取教授、「ロド ブシン」研究
2020/12/23	朝	16	名古屋工業大学	—	遠隔のみでの授業、前期79%・後期56% 東海地方の 国立大
2020/12/28	朝	11	藤田素弘	社会工学専攻	つながる ひろがる あなたの声 危ない身近な交差点
2020/12/29	朝	1	未来通信研究センター	—	次世代通信、名工大に研究拠点 基盤技術共通化、自動運 転や無線に利用
2020/12/29	朝	3	勝馬亮	卒業生(ⅡM㉔)	この人 宇宙ビジネス相談窓口「宙サポ」の相談員 勝間 亮さん(32)
2021/1/16	朝	25	名古屋工業大学	—	きょうから大学共通テスト 力発揮願ひ 対策入念
2021/1/16	夕	1	名古屋工業大学	—	東海受験生「タクシーで来た」「食事する場所にも気を 付けた」
2021/1/17	朝	35	名古屋工業大学	—	共通テスト マスク 緊張 負けない 換気対策で防寒 昼食は黙々と
2021/1/17	朝	1	名古屋工業大学	—	初の共通テスト始まる 宣言下 コロナ対策徹底
2021/1/21	朝	24	名古屋工業大学	—	共通テスト ボーダーライン河合塾
2021/1/28	朝	28	鵜飼裕之	前学長	新学長に鵜飼氏 愛知東邦大
2021/1/31	朝	25	名古屋工業大学	—	【広告】女性が拓く工学の未来 名古屋工業大学
2021/2/8	三重版 朝	10	馬術部	—	県新春馬術大会&東近畿地区ホースフェスティバル(1月 30、31日・県馬術競技場)

名古屋工業大学基金のご案内

名古屋工業大学は、産業界、地域社会、そして卒業生の皆さまから支持される魅力的な大学づくりを目指しています。

世界へ羽ばたく多くの学生・研究者を支援するため、皆さまからのご寄付・ご支援をお願いいたします。

<https://www.nitech.ac.jp/kikin/>

名工大基金

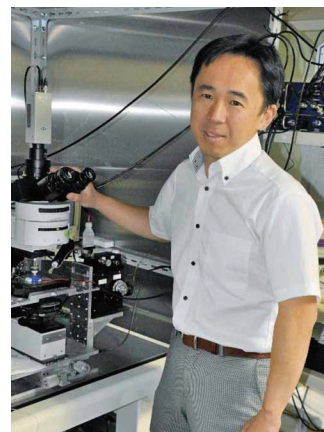
🔍 検索

ご寄付のお申込み、お問い合わせは、
基金室(Tel:052-735-5004 E-mail:kikin@adm.nitech.ac.jp)に、お願いいたします。

研究者紹介

微生物由来の新規酵素型ロドプシンの機能解析と光遺伝学への応用

研究者：名古屋工業大学大学院工学研究科
生命・応用化学専攻 角田 聡 特任准教授



光照射によって細胞や生体組織の活動を操作する手法は光遺伝学（オプトジェネティクス）と呼ばれている。光受容型膜たんぱく質「ロドプシン」の機能解析と、オプトジェネティクスへの応用を目指した光スイッチ機能を持つ新規生体分子を開発している角田聡特任准教授は、光の有無で活性をオン・オフできる光スイッチ型分子「ロドプシンフォスフォジエステラーゼ（Rh-PDE）」というたんぱく質を自然界から発見した。

Rh-PDEの分子機能を生化学的手法、電気生理学的手法を駆使して解明するとともに、創薬や治療への応用を視野にこの分子を利用した細胞内のシグナル伝達の光操作技術の確立を目指す。

◇Rh-PDEの光制御による視覚再生への挑戦

細胞内シグナル伝達物質である「サイクリックAMP」や「サイクリックGMP」などの「環状ヌクレオチド」は、細胞内で働くさまざまな酵素の機能を調整しており、必要に応じて合成され、環状ヌクレオチド加水分解酵素「フォスフォジエステラーゼ（PDE）」によって分解されることで、細胞内での濃度が適切に保たれている。シグナル伝達調節を行う酵素「PDE」の光操作が可能になれば、一般的な薬剤とは異なり、環状ヌクレオチドに関わるシグナル伝達系を光照射にかかる秒単位で、ピンポイントに操作することが可能になる。

1本のべん毛を持つ体長数ミクロンの単細胞生物「襟べん毛虫」のDNA配列情報から、光受容体であるロドプシンとフォスフォジエステラーゼが連続した遺伝子コードをゲノムの中に持つことに着目し、この遺伝子から作られるたんぱく質の精製に成功した。「ロドプシンフォスフォジエステラーゼ（Rh-PDE）」と命名したこのたんぱく質は、光に反応して環状ヌクレオチドの分解活性を示す。また、Rh-PDEを人の培養細胞「HEK293細胞」に導入したところ、青緑色光照射によって細胞内の環状ヌクレオチド濃度を抑制することが証明された。（図1参照）

環状ヌクレオチドは、認知症や、心臓疾患、失明に至る難病・網膜色素変性症などの疾患にも深く関与する細胞内シグナル伝達物質であるため、Rh-PDEを利用した細胞内シグナル伝達の光操作法が確立されれば、これらの疾患メカニズムの解明にも貢献することが期待される。Rh-PDEの光制御を応用し、高感度でより生理条件に近い視覚再生に向けた基盤技術形成にも挑戦する。

今後実用化に向けて、生体組織での実験データを取得し、生体器官に適応していく場合の条件設定を行い、創薬や治療に役立てることができるか検証していく。

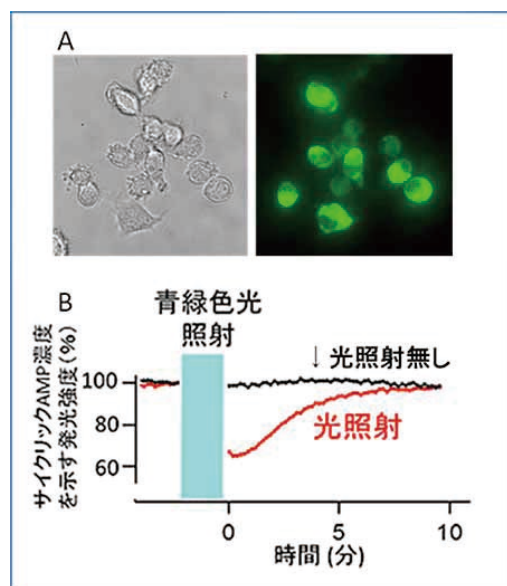


図 1

A：HEK293哺乳類細胞の顕微鏡像。緑色に光っているのはRh-PDEが導入された細胞

B：Rh-PDEを発現させたHEK293細胞におけるサイクリックAMP濃度の光操作実験

※グラフ中の黒線は光照射無しの対照実験

お問い合わせ先 国立大学法人名古屋工業大学 産学官金連携機構

〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町字木市29番

E-mail: c-socc@adm.nitech.ac.jp

URL: <http://tic.web.nitech.ac.jp>

手のひらサイズの超小型イオン銃が拓く新治療

研究者：名古屋工業大学大学院工学研究科 生命・応用化学専攻 大幸 裕介 准教授

半導体製造、がん治療、植物の品種改良など、産業、医療、バイオ技術など様々な分野でイオン注入が実施・注目されている。一般的なイオン注入装置は稼働に高真空を条件とし、巨大で高額である。室温の大気圧条件で作動する超小型イオン銃を開発できれば、細胞工学や医療など幅広い分野で活用できると期待されている。

大幸裕介准教授は、イオンが伝導する「イオン伝導性ガラス」という特殊なガラスに着目し、そのガラスを先鋭化して電圧を印加する簡便な方法において、室温・大気圧条件でイオン注入が可能な手のひらサイズのイオン銃を開発した。大気圧イオン銃の性能向上を図るとともに、室温付近の大気圧条件におけるイオン放出特性、イオン照射体に対する細胞の代謝活性や接着性、また抗菌効果などを調べ、イオン注入効果を明らかにする。



◇先鋭化ガラス先端の増強電場を利用した非真空イオン注入

鉛筆の後ろ側より先の尖った芯の側で手の平を押した場合の方が同じ力でも痛みを感じるように、応力や電場は尖った先に集中する。ガラス最大のメリットである成形性を利用し、イオン伝導性ガラスの先端を5マイクロメートル以下に先鋭化すると、先を尖らせていない平板と比べて50倍以上の増強電場が得られ、3kVの電圧を印加したときには実に150kV/mm相当の電界強度がガラス先端に集中する。加速電圧が3kV以上になると空気の放電も発生しやすくなるが、イオン伝導性ガラスを先鋭化することで3kV以下の加速電圧でも室温・大気圧条件でイオンを放出可能になる。

ガラス組成や作製方法を工夫することで、様々なイオンが伝導するイオン伝導性ガラスを作製できる。例えば、銀イオンを放出させる場合、棒状の銀ロッドをガラス融液に浸して引き上げる方法で、先鋭化した銀イオン伝導性ガラス（＝図1参照）を作製する。これまでに銀イオン（ Ag^+ ）のほか、水素イオン（ H^+ ）、銅イオン（ Cu^+ ）、フッ化物イオン（ F^- ）についてイオン放出を実証済み。ナトリウムイオン（ Na^+ ）、カリウムイオン（ K^+ ）についても実証間近である。放出させたいイオンに応じてガラス組成を適切に選択し、ガラス先端の形状を改良するなどして長時間の安定的なイオン放出技術の確立を目指す。

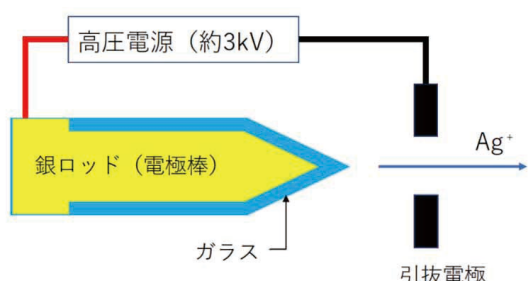


図1

銀イオン伝導性ガラス構造とイオン放出の仕組み

銀イオンを照射した試料と照射なし試料との対照実験では、銀イオン照射試料において食中毒や虫菌の原因となる黄色ブドウ球菌、ミュータンス菌の減少を確認している。ニキビや水虫など皮膚疾患の原因となる原因菌を根絶するなど、イオンビームの歯科や皮膚科治療への実用化が望まれる。さらに、イオン注入による培養細胞の活性向上も報告されており、皮膚の再生など再生医療の効果促進が期待される。今後は、イオン種およびイオン照射量と細胞の代謝活性や抗菌性の関係などをさらに詳しく解明していく。

お問い合わせ先 国立大学法人名古屋工業大学 産学官金連携機構

〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町字木市

E-mail: c-socc@adm.nitech.ac.jp

URL: <http://tic.web.nitech.ac.jp>

ホットライン

2020年度 第3回運営委員会開催

ブレーメンシュタインピアノコンクール全国大会で優秀成績受賞者に学生表彰
財政課題、ホームカミングデー、定期総会などが議題に



学生表彰（加川理事長と本居さん）



運営委員会の様子

2月3日、本部運営委員会を開催しました。

今回の会議は、東京、大阪、愛知などでの緊急事態宣言が出されるなかでの開催となりましたので、前回同様ZOOMによる遠隔会議の方式となりました。

冒頭、2019年度ブレーメンシュタインピアノコンクール全国大会ショパン部門で、第2位サファイア賞を受賞した博士前期課程情報工学専攻1年の本居千佳さんに学生表彰を行いました。

会議の議題は、名古屋工業会館跡地の駐車場活用、次期役員体制、財政課題、定期総会、事業計画、ホームカミングデーなどでした。特に財政課題、ホームカミングデー、新型コロナウイルス禍での定期総会の開催方法などについて、質疑応答、意見交換が行われました。

この日の運営委員会は、ZOOMによる会議開催も3回目となり、トラブルもなく順調に進めることができました。

事務局としましては、定期総会に向けて、方針の整理、実施方法の検討など、進めていきますが、引き続き新型コロナウイルス感染禍で2021年度事業をどのように実施していくのか、定期総会の開催方法も含め、難しい選択に迫られています。

なお、大学の行事については、卒業式・入学式が少人数の代表者による開催となったほか、2021年度の第一部の前期授業は半数出席とオンディマンドの組み合わせによる実施となりました。

（名古屋工業会事務局）

『投稿のお願い』

名古屋工業会 広報委員会

【原稿のジャンル】

- ◆ 交流コーナー（4頁以内）：ご自身のお仕事上の経験などを紹介
 - ◆ 学生コーナー（2頁以内）：名工大生の様々な活動を紹介
 - ◆ 研究紹介（4頁以内）：オリジナリティと学術的有用性のある研究論文
 - ◆ 講座（4頁以内）：最新技術情報など一般読者に役立つ内容
 - ◆ 随筆（3頁以内）：見聞・体験・感想・在学時代の思い出など
 - ◆ 紀行（3頁以内）：海外出張・留学・旅行など
 - ◆ 情報ネットワーク（1頁以内）：支部報告・会員ニュース・お知らせなど
 - ◆ 他に俳句・詩などの文芸、会員の著書・展覧会などの寸評、その他のご自由な意見など（1頁以内）
- これら以外に広報委員会が設定する特集・連載記事を募集または依頼します。

【投稿規定】

- (1) 原稿の種類 掲載希望ジャンルを上記から選択してください。
- (2) 原稿の長さ 1頁あたり「文章1,000文字+写真・図・表2点」が目安です。規定の頁数に収まるように作成ください。
- (3) 原稿の作成と入稿
 - ・原則として当用漢字と現代かなづかいの口語体を基調とします。
 - ・刷り上りはA4版2段組です。標準の文字数は1段が「21文字×38行=798文字」で、1頁につき「21文字×38行×2段=1,596文字」です。
 - ・手書き原稿でも結構ですが、なるべくワープロソフトを使用し、図表を含め仕上がり紙面に近い書式で原稿を作成ください。
 - ・写真および図版はお送りいただいたものをそのまま使用します。その場合、提出は(JPEG)を歓迎します。写真や図版ごとにキャプション(短い説明)と通し番号を明記してください。
また、会誌「ごきそ」へはモノクロで、ホームページへはカラーで掲載致しますので、ご入稿の際はカラー版をお送りいただけましたらと思います。
また、校正は色校正でもお出しできますので、ご希望の際はご連絡ください。
 - ・電子メールでの入稿(Word、Excel、PDF、text等のファイル形式)を歓迎します。
但し、PDF原稿の中に写真や図等の貼付けがある場合、その部分の解像度が落ちてしまう可能性がありますので、できましたらJPEGファイルも別添いただきますようお願いいたします。
- (4) 原稿の採否および掲載時期
 - ・原稿は、原則として未発表のものに限ります。原稿の採否および掲載時期は『ごきそ』編集委員会にて決定します。原稿の短縮や、表現・内容の修正等をお願いすることがあります。
- (5) 著者校正 通常の場合、初校の著者校正をお願いします。
- (6) 原稿表紙 電子メールの本文、あるいは原稿表紙には次の情報を記載ください。
 - ・著者名と所属
 - ・本学出身者の場合は卒業した学科(あるいは専攻)、卒業年度
 - ・原稿の種類(掲載希望ジャンル)
 - ・原稿の題目
 - ・顔写真の有無(有りの場合はプリントまたは電子ファイル(JPEG)を添付)
 - ・ご連絡先(郵便番号と住所、電話・FAX・電子メールなど)

【原稿送付先】

原稿送付および投稿に関するお問い合わせは下記宛にお願いします。

〒466-0061 名古屋市昭和区御器所町字木市29番

国立大学法人名古屋工業大学 校友会館内 広報委員会

Tel: 052-731-0780 Fax: 052-732-5298 E-mail: gokiso@lime.ocn.ne.jp

60名のデンソー等企業出身者が御社の課題を解決します！

技術支援

メカから電気・電子、半導体まで
開発設計、品質、生産技術、生産まで

研修・講演

技術系全25講座—材料、加工、設計、電気・電子、
組込コンピュータ各種要素技術…
品質系全30講座—DRBFM、なぜなぜ分析など
各種未然防止手法
マネジメント系全10講座—経営品質、もしどらシナリオ、
プロジェクト管理…

『開発設計の教科書』(日経BP 2019出版)

WORLDTECH 株式会社 **ワールドテック**

代表取締役 寺倉修(F50)

〒460-0008 名古屋市中区栄5丁目28番12号 名古屋若宮ビル6階
TEL: 052-211-7861 E-mail: solutions@worldtech.co.jp

企画から製本まで承ります。

企画・デザインから製本まで
トータルサポートでお値打ち!!

デザイン

名刺・ハガキ・封筒・チラシ・カタログ・
パンフレット・ポスター 定期刊行物
etc.
タイプ・電子組版時代から築き上げら
れたノウハウはDTPにおいて、特に
不得意とされる版組の書籍・表組み
の良物も得意分野です。

印刷

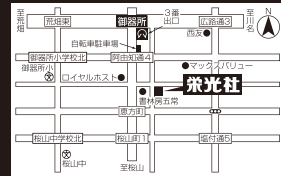
カラー印刷・2色刷り・1色刷り・特色
刷り、品質・部数・ご予算に応じて提供
いたします。
Macintoshのみならず、ワード・太
郎等の通常オフセット印刷に適さな
いWindowsデータの出力ノウハウも
ありますのでご相談ください。

製本

自筆・体験記・詩歌・俳句・小説・エッセイ・電話帳・絵本等、自分の本を作りた
いとお考えの方。
各種マニュアル・広報・配布文書・名簿・
クラブ・サークル誌・宣伝物等、製本で
お困りの学生・法人の方、少ロットよ
うお手伝いします。

総合印刷の
有限会社 **栄光社**

〒466-0035 名古屋市中区松風町三丁目4番地 2F
TEL: (052) 848-6148
FAX: (052) 848-6518
URL: <http://www2.ocn.ne.jp/eik/>
E-mail: eikou@theia.ocn.ne.jp



(株)ブライダルは 名古屋工業大学会員の皆様の 「結婚」を応援します。

42年の実績

登録料 **100%OFF**

●ブライダルコース
¥231,000▶¥198,000 etc.*

●エクセレントコース
¥396,000▶¥363,000 etc.*

価格は会員サポート費・月会費(12回分)の税込総額です。

株式会社 **ブライダル** お問い合わせ (月曜定休) ☎0120-415-412
<http://www.bridal-vip.co.jp>
名古屋本社 〒460-0008 名古屋市中区栄3-7-13 コスモ栄ビル9F

広報委員会

委員長 森川 民雄 (W45)

学内

吉田奈央子

佐藤 篤司 (A⑩)

田川 正人 (M56)

酒向 慎司 (I⑪)

杉本 英樹 (ZW⑥)

安井 孝志 (D62)

本多 沢雄 (ZY⑥)

小坂井孝生 (K49)

米谷 昭彦 (F60)

川村 大伸 (SS⑩)

宿輪 宏典 (名古屋工業大学 企画広報課)

学外

祖父江貴宏 (SC④)

成田 憲人 (SU⑩)

廣瀬 光利 (E50)

吉木 満 (W56)

高取 奨 (D⑥)

野々山尚志 (Y63)

大矢 泰正 (K52)

守田 賢一 (F47)

入倉 則夫 (B47)



一般社団法人名古屋工業会会誌 「ごきそ」に広告を掲載しませんか

「ごきそ」は隔月発行し、会員・廣告
主・関係官庁・各学会・大学・図書館等
に頒布されています。

詳細は名古屋工業会のホームページ

<http://www.nagoya-kogyokai.jp/>

でご確認ください。

※広告を募集中です。お問い合わせは名古屋工業会 E-mail: gokiso@lime.ocn.ne.jp までお願いします。